

九月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

都知事選

桑原正紀 東京

春の池の蝌蚪さながらに都知事選立候補者が五十六人

売名や宣伝、茶化しも入り混じり東京都知事選はお祭り模様

お祭りと化せる選挙は平和ゆゑされどあやふくまづしき平和

東京都の予算は十六兆余にてスウェーデン一国に匹敵をする

学べしスウェーデンの予算の七割は福祉・教育・文化であること

ロシアンブルーの子猫

清水正子 神奈川

熊たちの冬眠明けの御馳走ぞ露の臺けふは天ぶらにする

それは駄目といふ声すれど靴下を履いて寝るのがわたしの流儀

五十年生きし桜のまつさらな切株に会ひぬ鋸屑ふみて

公園のシンボルツリーなりし桜われは最後の花見せざりき

病むとなく気怠くすぎてゆく五月ロシアンブルーの子猫に会ひたい

只事

小嶋一郎 佐賀

見なくてもよいといふのか頂傾し咲く白百合の意志にしたがふ

人去りしベンチに残る温もりは何となく嫌われは坐らず

わがシャツと妻のエプロン干されあるこの只事を眺めたりして

階昇る猫が続けといふごとき身軽きさまを見上げたのみ

わが家へと続く坂道仰ぎつつ百歩がほどを二度立ち止まる

古家の記憶

鈴木千登世 山口

むらさきに花咲かせつつ廃屋を呑み込んでゆく藤の腕力

あでやかな女御が魔であることに似て地を這ひすすむ藤のしぶとさ

一棟を領し終へたる山藤は吸ひ上げをらん古家の記憶

家の持つ記憶を糧に咲く花のあらばよ愛しからんその花

人間が拓きし土地を植物が取り戻しゆく夏を力に

☆

☆



水鳥晴子 兵庫

夜更けて窓のまともにもめぐり来ぬ十六夜月の大き黄のいろ
まるがほのあなたを思ひうりぎねのあなたをおもふ雨の日曜
煮えたぎる怒りのほり来窮乏の戦後をえがくドラマ観終へて
活潑な這子であつたわがいとこ区長の務め果たして去りき
梅雨まへの曇き陽射しに穂のさきのしろく萎えつつ振花いくつ

高野公彦 千葉

踏青といふ語は死語か駄への道連なりてゆく歩きスマホ族
命とはかくも美し水面ゆくあめんぼの細き細き六肢よ
銅像の西郷隆盛と犬の(ツン)スマホ時代の曇き陽を浴ぶ
非運の死遂げたるものたましひは銜となりて森に棲むといふ
ぬか雨と小ぬか雨の差思ひつつ言葉染しむ細雨ふる朝

奥村晃 作* 東京

本当にリーダーと呼べる人居らず(戦争止まず)(格差そのまま)
ブーチン・ゼレンスキー・ネタニヤフ・ハマス皆同じ(戦争止めず)(民を思わず)
ガザ侵攻に抗議して起つアメリカの若者たちに希望を繋ぐ
人々を苦しめるのみの戦争は止めるべきとは思いませんか
一体どこに真のリーダーは居るのかね国の内外を眺めてみて

森重 香代子 山口

かへるでの若葉あかるき苑めぐる独りに倦みし家いでて来て
いいお日和 白弾け咲くユキノシタ一茎摘みて山の苑にをり
ひつそりとドクダミ草の育ちをり老ひとり棲む家の溝辺に
釣銭の拾円玉の一つをば掌にしてをりぬ意外に重し
蝦蟇口の底に嵌りてゐし硬貨 昭和四十八年発行なり

影山一男 千葉

スターウオーズの悪の帝国率あるは仮面かぶらぬダース・ブーチン
無名なるスカイウォーカーあまたゐて欧州に一国は滅びざりけり
はつ夏の雨の匂ひを運び来て祭のあとの街を吹く風
鉄槌を下す術なしモラルなく令和を生きる彼奴此奴め
しとしといふオノマトベ失せにたる梅雨は奪へり稔りの季を

狩野一男 東京

いづこにもハラスメントが横たはり戦ひながら我進み行く
おとなしい七十代のこの胸にしまつておけぬ正しい怒り
日常を祝祭にする、とかいへる歌集あらはる我らの横に
丸つ切り昭和の我を揺さぶつて清々しけれ歌集『こいつら』
北の人佐倉井さんはしづしづと闘病力で夏凌ぐらむ

宮里信輝 神奈川

夏陽差しよるこびてをり「鳥居原庭園」の葉つばいち枚いち枚が
木々たちと同じみどりはありません一本一本それぞれのみどり
友達となりたる梅の木が落とす大きな実のひとつもらへり
田植糸終へ苗が根付きてゆける田よ宮ヶ瀬湖より来る水を得て
苗育ち稲となり米が実る田よ空には天つ陽が照りてをり

小島 ゆかり 東京

残り鴨川面をつつき葦叢の水はまなつのまみどりになる

還りゆく家ならねども緑陰にピアノの音の聞こえる家

青葉光街ゆく人の一人だにわが母ならずわが父ならず

こんなはずぢやなかつた ならばどんなはずだつたか 夏の雲湧き昇る

「おいしいよピリヤニ」と娘言ふなれど思ひ描くさへでできずピリヤニ

木畑 紀子 京都

ゴミ出しの帰り手ぶらの背に差せる朝陽ぬくしもけふ無事であれ

くるまの世メールの世にもポストまで心をはこぶ徒をたのしむ

野あざみを手折り「あざみの歌」うたひ野辺をもとほるむかし乙女は

もどらないじかんといへどよろこびをふりかへることできるにんげん

「何の花？」ゆびさす人にをしへたり定家葛と委細はいはず

島田 暉 神奈川

水の上藤波の花揺らす風人生なほも詩情はなやぐ

雨の日は戩菜の花はなやげり忘れ心を白く突き刺す

花衣散る花びらはひとりづつ最後の生命を風が舞ひ上ぐ

弱き風強き風にも耐へながら立ちて揺らげりチューリップの花

朝けから妻の心はほのぐらし稲妻言葉背なにひそませ

大松 達知* 東京

教会はただにしずかにああそれはあなたが乗り越えたということ

カルシウム足りていますか、訊かれたる血管あらへおはよう靴下

好きだった、いつでもそばにいてくれた、それでもひとつ穴が空いてた

じじいばあに(なれるかどうか)(もし仮りに)なつたら(なれるだろうか)

やめると言えばやめられたことやめないで来たことひとつたぶんやめない

田宮 朋子 新潟

ハイウエーの土手の草木暗くして下の水辺に夏虫の飛ぶ

千歩ほどなれども夜道おそろしく車に乗りてほたる見にゆく

惣闇に点きては消えて浮遊する源氏螢のつめたき光

夜空より暗き大地に緑金のひかりをともし恋螢舞ふ

田舎家の夜の網戸にあえかなる光をはなつ螢火ひとつ

津金 規雄 神奈川

主人公より年高のわれが読む「山の音」にあり老いの諸現象

短編の名を冠したる特急が伊豆へと向かふ 昭和も今も

唐突な自裁の報は国文学科入学の月にわれを撃ちたり

受賞せる川端、大江 逸したる谷崎、三島 いづれか優る

文豪の旧居残れる街にひらく月例歌会は滑川べり

小山 富紀子 京都

大服をすすれば茶碗が顔隠すこの間に次の言葉探さな

軍人としては優良商人としては不良の伯父の生涯

早苗田のみどりはいつか茶畑のみどりに変はり静岡に入る

老犬がしあはせさうな顔をして門に眠れる柴犬日和

押入れにちんと畳まれ老いてゆく嫁入布団の絹の紫

福士りか 青森

日曜といへども猫に日曜なしいつものやうにミャアと鳴く四時

味噌汁をつくり洗濯ものを干し猫よだあれも起きてこないぞ

「生きじゃあ」とは津軽の「How are you!」起きて来ぬ父に「生きじゃあ」とは言へないが

ジャムのびん蜂蜜のびん開けられず(やむなく)小麦の味を楽しむ

「リポビタンDの蓋ならペンチで開く」出来ること増え父は「満悦

藤野 早苗 福岡

暮らしからテレビ、新聞消えゆけり二十世紀を墓標となして
大過去と葬^{はら}りゐたればみづみづと梨に息づく二十世紀は
カリカリも食^はべなさいよと言ひ添へて茹でたさみを皿に用意す
いりうみの風の映せるゆふあかね浄土の叔父も目を細めぬん
油谷湾を眼下にのぞむ石段の上なる家に一生詠ひき

風間 博夫 千葉

腕時計見れば遅れてゐる電車站の時計に合はせ来たりぬ
海老天のシッポをかじるかりかりと歯ごたへのありよく揚げてある
かすかなる心のうごきそを生みし具体の景色見のがさずあれ
小きちさきちさき感動その具体ミニミニなれど見のがさずあれ
平穩な暮らしの中で生まれゆくミニ感動を歌にすくはむ

田中 愛子 埼玉

エコバッグにチョコや煎餅もたまと詰めてコンビニの流れ止めたり
熊注意の村内放送ききながら蕨をんせんの外湯に向かふ
畳の上に食卓、椅子が据ゑてあり家族でまもる山の湯の宿
山ふかき宿の夜更けにとほく聞く鳴き声あれがもしかして鶴
五角形にゆかたの帯をたたみつつ友との旅のをはりを惜しむ

橘 芳 園 新潟

大いなるものが生みゆく悪ありや国、都市、企業、政党、そのた
本願寺末寺の離脱、廃寺増え巨大伽藍はやせ我慢する
古寺大寺伽藍競へど親鸞の透明伽藍の地球美し
庶民らは窓から仏を拜ませてびやうどうあんんと頼通名づく
びやうどうあんん仏拜むさへ庶民らは池越しの小さき暗き窓越し

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう コスモス叢書第1233篇 六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三二二四一〇
マリノホームズ1A 六花書林

高野公彦評論集 令和6年3月刊 二八〇〇円(税別)送料三〇〇円

歌の魅力の源泉を汲む コスモス叢書第1235篇 柘書房

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼一―二―二五〇六

小島ゆかり歌集 令和6年7月刊 三〇〇〇円(税別)送料三〇〇円

はるかなる虹 コスモス叢書第1236篇 短歌研究社

連絡先 〒112-0013 東京都文京区音羽一―一七―一四
音羽YKビル 短歌研究社

齊藤梢歌集 令和6年7月刊 二二〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青葉の間へ コスモス叢書第1237篇 柘書房

著者住所 〒982-0831 宮城県仙台市太白区八木山香澄町
二―一―〇一三〇六 薄葉様方



水上 比呂美 東京

スペイン人は(キリスト)と見て日本人は(時計)と見たるパッションフラワー子を抱いて朝のテラスに立つむすめを宗教画のごと見上げてゐたり七竅しちけうの中の一つの子の口に哺乳瓶なる吸ひくち入れぬ赤んぼは渾沌様でなきゆゑに目鼻口耳定位置にあり

鈴木 竹志 愛知

夏なつの夜のくだものといけい草の実はほの明りして孵化するけはひガザといふ言葉はあふれキーウとふ言葉少なし報道の性報道は常に選択を強ひられて今はまだガザに価値を見いだす報道に矜持はなきかと常おもふ無難な記事に満つる新聞報道の理念はいづくにあるのやらひよつとして利益だつたりして当選さへすればすべてが許されるなどとふ神話に議員は縋る

原 賀 璽 子 東京

起こりたることの範囲が広すぎて重すぎて だけど新聞を読むきのふまで死角にをりしゼフィロスが突と見えきぬヴィーナスを消し文鎮はけふも遠くて卓上のはさみで本の頁をおさふ水無月は虫のつく月マスクしていちばん弱いバラに葉す庚申の近づく夜なり眠らずに世界こぞりてガザを思はば

水上 英 季 神奈川

物言ひの土俵上のごと職員が課長囲んで話してゐたるカウンターに東郷青児の描く目の人がゐて青い酒を飲みをり覚えてる? 「正夢」かかる病室で産まれ出たこと、われと会つたこと何か予知したかのやうに泣き出して目でわれを追ふ夕方の吾子精米し一歳の子に背負はせた「銀の胼」みづか大粒で美味

大野 英 子 福岡

家ごもりして嗅いでをり鉄錆の匂ひのまじる港の風をこんなにも人が近しくなつてゆく批評会のため「灯船」読んでブラインドの隙間に見える太陽がだんだん大きくなる 夕暮れだ明るすぎる新幹線に疲れゐて見るともなく見る暗き町並み主命易つづけて馬車土と入れ替はるコーンが置かるる、ああ駐輪場

松 尾 祥 子 東京

しつかりを二五〇〇回以上言ひ具体策無し岸田首相はえりあしを刈りあげにして今日われは五月の青き空わたるべし「大丈夫です」は不要の意思表示ああ漬物は嫌ひだつたね嫌やな言葉バワハラ、カスハラもつと嫌オヤカク、オヤコミ、親ガチャ子ガチャ日本語は絶滅危惧種 カタカナのカルイ言葉に置きかへられて

小 島 な お* 東京

平皿に塗り込められた蔦の葉が縁のめぐりを這うような声室外機にファンは震えて外れなくなつた指輪の話が終わる木の匙ですくう豆腐の地平には塩の雪降る 二人の家族手懐けることは猫から一度きりしろい棧橋掛け渡されるばろばろサブレこぼして旅を、階段の裏側へまわり込む真夏の陽

小田部 雅子 静岡

斉藤 梢 宮城

沖繩で保守が勝ちたり中国にいちばん近い島人の意志
骨董品のやうな昭和のわれらかな正義も平和も棄てがたくある
武器持たぬ平和にしがみついていたわれらがぐらり揺らぐこの朝
ウエブニュース閉ぢれば浮かびくるむかし未来だけ見て生きてた昔
少女期の昔にうつとりするなんて、ブルツと振るつて立ち上がりたり

感触をまだ覚えてる摘みしときの 赤詰草と白詰草の
「マンションの」といふ初句の終二の歌ころさびしい時に思へり
ポケットより二個を取り出すハッカ飴 十六年を夫と暮らして
祖母の庭の池の近くの明暗よ藍染の毬あぢさゐの毬
初夏なのにポトフを食べて実直な人参にいま励まされてる

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

九月の味 ―むらさき、すなわち鯛―

鯛うぶさきを食ひたる口を拭ひつつ書きたら
む「いづれのおほんときにか」
山笠やまのいき井喜美枝みみえ

勤め先の近くに「傳八」という居酒屋があつて、ときどき飲みにゆく。いわしと牛タンを得意とする店である。日本酒にはいわしがよく合うので、いわし料理を食べることが多い。刺し身のほか、フライ、つみれ、さんが、南蛮漬、骨の唐揚げなど、品揃えが豊富である。そして、どれももうま

私は少年時代、瀬戸内海に面した小さな港町で育った。毎朝、漁師のおかみさんが獲れたての魚をカゴに入れて売りに来た。「ほうたれいわしは要らんかのう」という

柔らかい売り声を今でも覚えている。母はそれを買って食卓に出した。日本人のよく食べるいわしは、真鯛・片口鯛・潤目鯛うるめの三種類だそうだが、「ほうたれいわし」とはそのいずれだつたらうか。母は、いわしを煮魚にすることが多かった。ちいさく刻んだシヨウガが、臭み消しに入っていた。焼き魚のときもあった。手間をかけて、つみれにすることもあった。その場合、搦鉢

で播るのは私の役目であつた。

そのころ、わが家では刺し身は食べなかつた。母は、いわし独特の生臭さを消すことができなかったのだから。「傳八」の刺し身は全く臭みがない。腕のいい料理人がいるのだから。

あの紫式部も、いわしを食べたらしい。右の一首(歌集『火渡り』より)は、彼女がいわしを食べたあと、口を拭きながら源氏物語の冒頭を書き始める場面を想像している。「むらさき」というのは、いわしを指す女房詞である。「和訓栞」という書物に、いわしを食べる紫式部の話が出ているそうで、これはその逸話をもとに作られたユーモラスな歌である。